

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00375

研究課題名(和文)雑誌『語絲』に見える周氏兄弟の岐路

研究課題名(英文)Separation of Zhou's brothers in the magazine"yu-si"

研究代表者

小川 利康(OGAWA, Toshiyasu)

早稲田大学・商学大学院・教授

研究者番号：70233418

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：従来政治的意図で偏頗を免れなかった魯迅、周作人(周氏兄弟)の文学的評価を緻密なテキスト考証によって再検討し、文学者としての思想根幹を解明するため研究を開始した。『語絲』における周氏兄弟の思想的親和性とその後の分岐要因を解明、文学史に位置づけることを目指し、1)周氏兄弟の翻訳比較、2)周氏兄弟の三・一八事件における対応比較、3)周氏兄弟と『語絲』同人との関係、を重点的に研究した。2022、2023年度にオンライン・シンポジウムを開催し、2022年度から研究誌『周氏兄弟研究』を刊行した。従来の孤立的な個別作家研究の限界を超越して、周氏兄弟をめぐる『語絲』作家像の一端を描出することに成功した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義は、この研究を通して従来顧みられなかった『語絲』における周作人の戦闘的な一面をテキストに即して解明した点にあり、その対蹠的な立場にあった魯迅の新たな一面の解明にもつながったと考える。この研究の推進を通して実現した社会的な意義としては、今回の研究を通して、今後の周氏兄弟研究を担う中国と日本の若手研究者をオンラインとはいえ一堂に会して討論する機会を設けて、近来コロナ禍のもとで激減していた日本と中国との間での文化的交流にも資するところがあった点を強調したい。

研究成果の概要(英文)：We began this research to reexamine the literary evaluation of the Zhou brothers, which had not been free from partiality due to political agendas, and to elucidate the basis of their thought as literary scholars. In order to elucidate the ideological affinity between the Zhou brothers during the publication period of "Yusi" and the factors that led to their subsequent divergence, and to place them in the history of literature. We were able to hold an online symposium and publish the research journal "Research on the Zhou Brothers" from FY2022. We believe that we have succeeded in overcoming the limitations of conventional, isolated research on individual writers, and in developing a picture of the Zhou brothers and "Yusi" writers.

研究分野：中国現代文学

キーワード：周氏兄弟研究 周作人 魯迅 『語絲』

1. 研究開始当初の背景

魯迅(1881~1936)、周作人(1885~1967)という周氏兄弟二人が中国現代文学で果たした役割は大きい。魯迅は文学革命における口語文学の提唱に呼応し、その理念を裏づける創作「狂人日記」(1918年)を発表し、周作人は評論「人間の文学」(1918年)で人道主義を標榜し、口語文学の目指す理念を示した。だが、二人とも文学的名声ゆえに政治的に利用され、魯迅は後年「革命の聖人」に祭り上げられる一方で、周作人は民族の敵たる「漢奸」として断罪された。民国期から新中国成立後まで、かくも対照的な毀誉褒貶のもとで二人の本来の評価は滅却された。文学革命から一世紀経過した今こそ偏頗を正すべきである。

文学における創作表現にせよ、現実における社会活動にせよ、すべて一人の人間の思想的営為から導かれた結果であり、別々に論ずることはできない。だが、社会活動から出来た政治責任によって文学的评价を定めるのは論理的倒錯である。そのような倒錯から魯迅を救済するため、分担研究者長堀祐造は緻密なテキスト考証を通して、魯迅の原像解明のために努力してきた。まったく異なる文脈に身を置いた周作人も日中戦争期における対日協力問題ゆえに文学上の功績が全面否定される時代が長く続き、政治的過誤から周作人を断罪する傾向は今なお残る。本研究は緻密なテキスト考証を基礎とした研究で魯迅、周作人の原像を解明しようとする試みである。2018年7月に開催した「第1回周作人国際学術シンポジウム」(2018年7月、早稲田大学)において、止庵(『周作人訳文全集』編者)は発表論文の結びで次のように述べ、内外の研究者から強い共鳴をもって迎えられた。

「1,ある人間の行為の動機と結果は必ずしも一致せず、同列に論じるべきではない。2,動機が結果を導くが、因果関係を顛倒させて結果から動機を推論してはならない。(略)6,私たちは歴史の終点に立ち、歴史の起点に立つ者に私たちと同じ考えを持つよう要求してはならない。よしんば彼らの短慮を批判するとしても」。

これは周作人の対日協力に即した発言である。日本における戦争責任と同様、結果責任が問われる政治で周作人は今後も批判を免れない。だが、政治責任と文学創作を別個に考える発言が中国でも主流を占めつつある。本研究は、如上の学術的背景に基づき、「周氏兄弟と『新青年』グループ」(基盤研究C)から更なる発展的研究を行うものである。

2. 研究の目的

本研究は『語絲』刊行期における周氏兄弟の思想的親和性とその後の分岐の要因を解明し、文学史に位置づけることを目的とする。五・四時期に文学的出発を遂げた周氏兄弟は1923年夏に家庭内の不和で訣別したが、その後も文学、思想両面で共通点は多い。二人に看取されるのは日本の文学、思想からの影響である。社会的にも二人は女師大事件(1925年)、三・一八事件(1926年)への対応で共同歩調をとり、五・四時期以後も二人の間には共通の思考回路が依然として働いていたことが窺われる。その二人が文学、社会双方で思想的障地としたのが文芸週刊誌『語絲』である。本研究は、周氏兄弟の思想的親和性とその後の分岐の要因を明らかにするため、『語絲』刊行期における周氏兄弟の文学と思想を比較研究する。特に1)周氏兄弟の翻訳の比較、2)周氏兄弟の女師大事件、三・一八事件における対応の比較、3)周氏兄弟と『語絲』同人との関係、以上3点を重点的に研究する。

1)については魯迅の翻訳に関する研究の蓄積を基礎とし、周作人との比較に重点をおいて研究する。魯迅にとって、『語絲』刊行期は、文字通り彷徨の時期だった。周作人と訣別して西三条胡同に転居したが、三・一八事件後、軍閥の弾圧に身の危険を感じ、1926年8月に北京を脱出、厦門大学に赴任、1927年1月には中山大学に転じるも、6月には辞任、10月には上海で許広平との新生活に入った。この間、魯迅は厨川白村『苦悶の象徴』(1924年)を皮切りに、『壁下訳叢』(1929年)所収の有島武郎、武者小路実篤らの評論を精力的に訳し、これらは魯迅の文学的関心の所在を示し、周作人との共通点も多い。だが、もう一方で茂森唯士訳『文学と革命』を通してトロツキー文芸理論への関心が芽生え、1926年7月頃にはその一部「アレクサンドル・ブローク」(第3章)を訳出し、周作人と異なる方向性を示した。周作人との比較によって魯迅文学の特性を浮き彫りにできよう。

2)については、魯迅と周作人との間で女師大事件、三・一八事件への対応における差異を明らかにし、その後の思想の分岐を跡づけたい。女師大事件は、新たに赴任した楊蔭榆校長の強権的運営が学生たちの反発を招いたため起きたが、教育総長章士釗も介入し、女師大には廃校の危機が迫り、学生を擁護した魯迅も教育部官僚の職を失った。周氏兄弟は一致して学生擁護の論陣を張り、政府を弁護する胡適、陳西滢ら『現代評論』と激しく論争した。この論争は、反政府デモに参加した学生が多数殺害された三・一八事件が発生するに及んで激化した。この一連の事件への対応で魯迅と周作人との間には大きな差異が見出される。その最大要因は魯迅と許広平(女師大学生)との恋愛である。魯迅「劉和珍君を記念する」(1926年4月)では哀悼の念だけでなく、「いたずらに生き延びた」自責の念がにじむ。周作人「哀しむべき事、恐るべき事」(1926年3月)で示されるのは亡くした学生をわが娘の如く哀しむ憐憫の情である。この対照的な対応が二人の後半生を変えたと考えられる。

3)については、『語絲』など関連刊行物の実態分析を行い、魯迅・周作人と他の同人との関係を解明し、二人が『語絲』で果たした役割を明らかにしたい。『晨报副鐫』は1921年10月創刊以来、周氏兄弟の主な寄稿先の一つだったが、1924年10月、魯迅と周作人の原稿が無断で没にされたため、編集担当の孫伏園は憤激して辞職した。そこで新たに『語絲』が創刊され、周作人が実質的主編をつとめた。魯迅は1923年7月に家庭内不和で周作人と義絶していたため、同人たちと一線を画したが、散文詩「野草」など重要作品を寄稿し、『語絲』を支えた。このほか魯迅の勧めで孫伏園は『京報副刊』(日刊、1924年12月～1926年4月)を創刊し、『現代評論』との論争では主戦場となった。若手作家の小説・詩歌・翻訳が中心となった『莽原』(1925年4月～1927年12月)は、魯迅の手で創刊されたものである。これら『語絲』と関連雑誌を含めた文学活動を俯瞰した研究は従来行われておらず、周氏兄弟が若手作家に与えた影響を明らかにするために詳細な調査分析が必要である。

3. 研究の方法

本研究では、如上の研究目的を達成するため、以下の計画に基づいて研究を進めたい。初年度の2020年度(令和2年度)は先行研究の総括と研究情報の収集を目指し、2年目の2021年度(令和3年度)は研究の深化と新たな知見の発信を目指し、最終年度の3年目の2022年度(令和4年度)は研究の総括と内外の研究者との交流を目指したい。

1) 周氏兄弟の翻訳についての比較研究については、分担研究者秋吉収を主担当とし、申請者小川利康、分担研究者工藤貴正、長堀祐造(2020年度のみ参加)が補佐する。2020年度は『語絲』刊行時における周作人の翻訳に関する調査を主として行う。調査にあたっては『周作人訳文全集』(全12巻、改訂新版、上海人民出版社2019年)をベースに、『周作人年譜』(改訂版:天津人民出版社2000年)、『周作人日記』(大象出版社1996年)も参照し、初出書誌の確認を行い、依拠した翻訳原典を出来るだけ特定し、書誌を精査する。現在、周作人の翻訳については信頼できる書誌情報がなく、基本データを作成する必要があるため、アルバイトを雇用し、上記資料から必要項目を抽出し、データ入力する。作成したデータは分担研究者工藤貴正、分担研究者長堀祐造が校閲点検する。2021年度は、完成したデータに基づき、中島長文編『魯迅目睹書目(日本書之部)』(1986年)及び『魯迅手蹟和蔵書目録3 外文蔵書目録』(北京魯迅博物館1959年)と校合し、より正確で詳細な『周氏兄弟目睹書目(日本書之部)』初稿を作成し、北京の中国魯迅博物館で原典版本の調査を行い、修訂を行う。現地調査は分担研究者秋吉収が中心となり、申請者が補佐をつとめる。なお、同館副館長黄喬生氏より調査受け入れの内諾は既に得られている。2022年度は魯迅博物館での現物調査を踏まえ、追加調査を行い、最終版の完成を目指す。最終年度は国際シンポジウム「周氏兄弟と『語絲』」(仮題)を開催し、関連分野の研究者として王中忱、陳子善、止庵、趙京華氏を招聘、各氏から専門的知識について教授いただき、研究成果について討議する。

2) 女師大事件、三・一八事件に対する魯迅と周作人の反応の比較研究については、申請者小川利康を主担当とし、分担研究者秋吉収が補佐する。2020年度は、まず関連文献の初出誌テキストの収集整理を行う。『京報副刊』は国家図書館出版社2016年影印版を使用するが、可能な限り桜美林大学、東京外国語大学所蔵の現物も参照し、『現代評論』からも関連文章を収集する。完成したデータベースは分担研究者工藤貴正、分担研究者長堀祐造の校閲を経て、研究資料として発表する。2021年度は、女師大事件、三・一八事件に関する書簡資料、回想録の収集整理を行い、事実経過についての証言を時間系列で整理し、新たな事実関係を発掘する。分担研究者工藤貴正は参照すべき資料について助言を行う。2022年度は、周作人に即して女師大との関係について調査し、その成果を上記国際シンポジウムで発表する。

3) 周氏兄弟が係わった『語絲』同人たちとの関係についての調査については、関連する『京報副刊』、『莽原』も含め、作家別発表作品リストをデータベースとして作成するものとし、申請者小川利康が『語絲』、『京報副刊』を整理し、分担研究者秋吉収が『莽原』を整理する。現行の目録は筆名による分類のため、作家ごとの目録に編制しなおし、作品名を分類整理したうえで、分担研究者工藤貴正、分担研究者長堀祐造に校閲を依頼する。この作業については、上記2項目の作業の進捗にあわせて進めるものとする。

4. 研究成果

如上のように細心に研究計画を練り、スタートさせたプロジェクトであったが、科研費基盤研究(C)として採択された2020年度(初年度)は、コロナ禍によって図書館はおろか、大学にも出講できない状態のまま、荏苒として経過した。幸い自宅に備えた基本文献やかかねてより収集していた電子化された文献資料があったので、分担研究者との間で連絡を取りながら、各自研究を進めた。この間に急速に普及したオンライン・ミーティングの形態が共同研究のスタイルにも大きな変化を生んだ。

2020年度は、予定していたすべての海外出張、国際シンポジウムの開催を断念したが、当初計画した周作人に関する書誌調査を自力で進めるなかで、論文の材料を見出す形で研究論文を執筆していった。特に科研費で購入できた電子データ『京報副刊』、『語絲』(凱希メディアサービス)はコロナ禍にあって非常に有用だった。小川利康は『語絲』刊行時における周作人の文学活動についての論考を中国語の論文にまとめて発表した。「人的文学」的思想源脈論析 葛理斯与新村主義的影響」はロックダウン解除後に初めて発行された武漢の学術誌『長江学術』に掲

載されたものである。周作人は『語絲』創刊号に「生活の芸術」を發表し、そのなかでハプロック・エリスからの影響が鮮明になったが、その淵源は五・四新文化運動期まで遡れることが明らかになった。長堀祐造は慶應義塾大学経済学部での定年退職にあたって、慶應義塾中国文学会で「魯迅研究の回顧 わが三十三年の夢」と題して記念講演を行うなど、これまでの魯迅研究の総括を行った。工藤貴正は愛知県立大学外国語学部の定年退職にあたって、「魯迅と厨川白村・張我軍・毛沢東との交流及び関係をめぐって」と題する最終講義を行うなど、これまでの魯迅と中国近現代文学の関係を総括する研究を行った。秋吉収は魯迅を中心とする中国近代文学現象の研究と関連文献の調査に従事し、中国語で「芥川龍之介と魯迅」を、「成ホウ吾「詩之防禦戦」と北京星星文学社『文学週刊』再論：魯迅『野草』と成ホウ吾」を發表した。後者は、研究担当者の「魯迅」研究に対する中国（イデオロギー的に魯迅をやや神格化）からの批判を論駁するとともに、新たな発見を提示するものである。

2021年度も、コロナ禍の制約のなかで、研究代表者、分担者それぞれ個別に資料収集ならびに研究活動を行わざるを得なかった。小川利康は、『語絲』時期における周作人の研究を進めるとともに、周作人の思想に新たな角度から光を当てるべく、周作人と優生学の関係について考察を進めた。優生学に限らず、進化論は周氏兄弟の生涯にわたる思想を通観するうえで重要な視点であり、『語絲』時期の思想とも重要な関連を持つためである。また、自宅で松枝茂夫書簡及び日記（會津八一博物館所蔵品を撮影したデータ）を整理した。そのなかで得られた知見を「周作人と松枝茂夫 日中戦争を超えた友誼」（『三田文学』2021年春号）として發表した。長堀祐造は、晩年の魯迅と親交のあった瞿秋白についての文献的研究「瞿秋白『多余的話』異聞 - 『豆腐』の謎を解く試論」（『東方学』142号、招待論文）を發表した。秋吉収は、オンラインで開催された魯迅年會に招かれ、「魯迅と北京星星文学社『文学週刊』」を發表したほか、「散文詩人・徐玉諾と魯迅『野草』」再論 文学上の交流、エロシエンコそしてカール・ヨネダ、「關於紹介給台湾的“兩種”『阿Q正伝』」などを發表した。工藤貴正は、「李漢俊与表現主義：作為無産階級文藝表現手法的可能性(下)」（『上海魯迅研究』89期）を發表した。

2022年度は、ようやくシンポジウム開催の条件が整ったと考え、対面による開催の可能性を模索したが、実際には海外からの研究者招請は極めて困難であったため、最終的にはオンラインによるシンポジウム開催を決定し、2022年10月1日にオンライン（ウェビナー配信）で国際シンポジウム「周氏兄弟と1920年代 『新青年』から『語絲』まで」を開催した。會議は日中両言語を會議言語として進行した。中国から参加の7名、日本の8名とも日中両言語に通じた魯迅、周作人研究者であり、これまで注意されていなかった日中双方の貴重な文献史料による發表を行い、1920年代における草創期の中国文学に対する日本文学の影響の深さを改めて示すものとなった。シンポジウムはオンラインとなったものの、ウェビナー配信で行ったシンポジウムの参加者は延べで735名にのぼり、参加者は日本だけでなく、中国、香港から多数参加があり、少数ながら大韓民国、マレーシア、シンガポール、ドイツ、フランスからも参加があった。今後も対面による交流が重要であることはもちろんだが、もう一方でオンライン配信の持つ可能性は今後も出来るだけ生かしてゆくべきだと感じさせられた。

なお、国際シンポジウムによる共同研究の総括として、2023年3月には研究誌『周氏兄弟研究』（年刊誌）第1号を刊行した。魯迅、周作人研究を中心としつつも、関連する研究分野にも視野を広げる間口の広い研究誌として今後毎年刊行を継続してゆきたい。

論文の成果としては、国際シンポジウムで發表した論文を中心として期待通りの成果が得られた。小川利康「周作人的歴史循環論 從巴枯寧の警句説起」、長堀祐造「陳独秀訳注『婦人觀』（Max O'Rell 著）の日本書材源及びその訳注者・深澤由次郎について 併せてMax

O'Rell 原著にも触れて」、秋吉収「魯迅『野草』の掲載誌『語絲』について 「愛知県立大学」所蔵“原本”の発見」、工藤貴正「『五四』後の知識人の責任 「フェアプレー論」を巡る魯迅・周作人・林語堂の論理を視座に」を『周氏兄弟研究』第1号に發表したほか、秋吉収は「魯迅と日本大正文壇 以佐藤春夫為線索」（『紹興文理学院学報』）第42巻第11期）を發表した。

本来であれば、3カ年を持って、この研究を完成とするべきであったが、初年度に想定通りに研究が進まなかったため、1カ年延長を申請し、もう一年研究に取り組むことにした。

2023年度も対面による開催の可能性を模索したが、国際シンポジウムとして中国の研究者を招請する条件が整わず、引き続きオンラインによる開催を決定したが、対面による参加も可能とし、早稲田大学11号館會議室で、2023年11月11日に「周氏兄弟研究青年論壇」を開催した。意図したのは、先端的な研究を行う若手研究者を招聘し、日中間の研究交流を図ることにあった。

今回、1920年代の『語絲』刊行時期に関連する論題で發表をお願いしたが、相互に関連し合うテーマも多く、充実した内容となった。ただ、オンラインによる開催であったため、交流については物足りない部分があったことは否めないが、若手の論文には計量言語学的な手法を用いた研究から、伝統的な手法による論文まで多数發表され、大きな成果となった。

今回のシンポジウムでは、若手研究者だけでは、聴講参加者が少なくなることを懸念し、日本側からはベテラン研究者も論文發表を行った。長堀祐造、秋吉収の共著論文「制作魯迅「石膏面模」的牙科医生奥田杏花（愛三）の人物像 奥田杏花之子奥田昇夫婦訪問記」は、主題講演という位置づけで發表された。發表後、ただちに北京魯迅博物館が刊行する「魯迅研究月刊」（2023年12期）に一部が掲載された。發表論文を修訂加筆した論文は、『周氏兄弟研究』特刊Vol.1として2024年夏頃に刊行する予定である。今後、日本のユニークな研究を世界に発信してゆくた

めにも、日本語で執筆するだけでなく、より広い読者を獲得できるように中国語での発信が肝要であり、その媒体として、『周氏兄弟研究』を刊行してゆきたい。上記シンポジウムのほか、小川利康は、4年ぶりに中国（上海）に出張し、「“自己的園地”的探頤索隱-----以伏爾泰《老實人》(Candide)為線索」(「猶在二周之間 “周氏兄弟”與中國新文學國際學術研討会」、復旦大学2023年9月)を發表した。秋吉收は、「現代中国对日本文壇的訳介与接受 《現代日本小説集》為線索」(同、復旦大学9月)を發表した。

以上、4年間の研究によって、当初目的とした『語絲』時期における周氏兄弟の研究は概ね達成できたと考える。憾むべくは、『語絲』時期の周氏兄弟の訳業を検討するための書誌調査が未完成に終わったことである。書誌調査結果を公刊して、年譜資料として刊行することを企図していたが、現状では研究用ノートの域を出ず、単独で公刊するには至らなかったが、今後を期したいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計22件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小川利康	4. 巻 1
2. 論文標題 周作人的歴史循環論 従巴枯寧の警句説起	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 周氏兄弟研究	6. 最初と最後の頁 309-326
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 秋吉收	4. 巻 第42巻11期
2. 論文標題 魯迅与日本大正文壇 以佐藤春夫為線索	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 紹興文理学院学報	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 秋吉收	4. 巻 1
2. 論文標題 魯迅『野草』の掲載誌『語絲』について 「愛知県立大学」所蔵“原本”の発見	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 周氏兄弟研究	6. 最初と最後の頁 149-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 長堀祐造	4. 巻 1
2. 論文標題 陳独秀訳注「婦人観」（Max O' Reil 著）の日本書材源及びその訳注者・深澤由次郎について 併せてMax O' Reil 原著にも触れて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 周氏兄弟研究	6. 最初と最後の頁 40-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 工藤貴正	4. 巻 第60巻3期
2. 論文標題 雷震回憶録《我的学生時代》和大正主義時代 從「郷愁」、「文化伝統」、「文化変容」(濡化)理論的 視点	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『思与言』専号：自由民主思潮、台北：人文と社会科学期刊	6. 最初と最後の頁 165-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 工藤貴正	4. 巻 1
2. 論文標題 「五四」後の知識人の責任 「フェアプレー論」を巡る魯迅・周作人・林語堂の論理を視座に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 周氏兄弟研究	6. 最初と最後の頁 65-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 工藤貴正	4. 巻 第77巻3号
2. 論文標題 （光陰似箭）コーヒーを愛した二人の外省籍知識人を分けた運命 林語堂と殷海光の故居を訪れて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中国研究月報	6. 最初と最後の頁 65-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川利康	4. 巻 春季
2. 論文標題 周作人と松枝茂夫 日中戦争を超えた友誼	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 三田文學	6. 最初と最後の頁 138-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長堀祐造	4. 巻 142
2. 論文標題 瞿秋白「『魯迅雜感選集』序言」の位相－「魯迅解釋権」をめぐる毛沢東の暗闘－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東方学	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋吉收	4. 巻 1
2. 論文標題 魯迅と北京星星文学社『文学週刊』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 「魯迅誕辰140周年“魯迅と現代文化価値重建”国際学術研討会(第六届紹興文化峰会)」論文集』	6. 最初と最後の頁 679-687
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋吉收	4. 巻 57
2. 論文標題 「散文詩人・徐玉諾と魯迅『野草』」再論 文学上の交流、エロシエンコそしてカール・ヨネダ(米田剛三)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語科学(九州大学言語文化研究院)	6. 最初と最後の頁 35-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋吉收	4. 巻 47
2. 論文標題 研究ノート：山上正義訳「阿Q正伝」について 【国際プロレタリア叢書】(1931)と『大魯迅全集』(1937)の二種の翻訳(附：耿庸「胡風宛書簡」発見と楊達の使用した版本についての補足)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語科学(九州大学言語文化研究院)	6. 最初と最後の頁 51-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋吉收	4. 巻 2021年第10期(総第474期)
2. 論文標題 關於紹介給台灣的“兩種”『阿Q正傳』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 魯迅研究月刊	6. 最初と最後の頁 9-11
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 工藤貴正	4. 巻 89
2. 論文標題 李漢俊与表現主義：作為無産階級文藝表現手法的可能性(下)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 上海魯迅研究	6. 最初と最後の頁 152-165
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川利康	4. 巻 66
2. 論文標題 《人的文学》的思想源脈論析 葛理斯与新村主義的影響	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 長江學術	6. 最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川利康	4. 巻 33
2. 論文標題 1923：周作人与“甘粕事件”始末	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 華中學術	6. 最初と最後の頁 127-140
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長堀祐造	4. 巻 13
2. 論文標題 瞿秋白『多余的話』異聞 - 『豆腐』の謎を解く試論 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日吉紀要中国研究	6. 最初と最後の頁 159-220
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 工藤貴正	4. 巻 52
2. 論文標題 雷震と京都帝大教授・森口繁治 日本留学体験における初期民主・憲政思想の形成	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛知県立大学外国語学部紀要 (地域・国際編)	6. 最初と最後の頁 119-220
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 工藤貴正	4. 巻 53
2. 論文標題 張我軍と大正生命主義 時代の転換期の翻訳は何を伝えたか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛知県立大学外国語学部紀要 (言語・文学編)	6. 最初と最後の頁 191-214
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 工藤貴正	4. 巻 22
2. 論文標題 雷震回想録『我的学生時代』と大正主義の時代 ノスタルジア ・ 文化伝統 ・ 文化変容 の視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛知県立大学大学院国際文化研究科論集	6. 最初と最後の頁 79-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋吉收	4. 巻 1
2. 論文標題 芥川龍之介与魯迅	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 世界漢学研究 (Web版)	6. 最初と最後の頁 20-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋吉收	4. 巻 56
2. 論文標題 成ホウ吾「詩之防禦戦」と北京星星文学社『文学週刊』 再論：魯迅『野草』と成ホウ吾	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語科学	6. 最初と最後の頁 27-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 小川利康
2. 発表標題 周作人的歴史循環論 從巴枯寧の警句説起
3. 学会等名 国際シンポジウム：周氏兄弟と1920年代 『新青年』から『語絲』へ (於：早稲田大学、オンライン) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 秋吉收
2. 発表標題 “親人”是誰？ 徐玉諾護送愛羅先珂の真相
3. 学会等名 全国第二屆徐玉諾文化暨地域文学學術研討会 (中国・平頂山学院、オンライン)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 秋吉收
2. 発表標題 『語絲』版本攷
3. 学会等名 国際シンポジウム：周氏兄弟と1920年代 『新青年』から『語絲』へ（於：早稲田大学、オンライン）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 秋吉收
2. 発表標題 關於魯迅『野草』的刊載雜誌『語絲』
3. 学会等名 中国魯迅研究会2022年会暨“魯迅研究的歷史回顧与範式推進”國際學術研討会（於：北京第二外國語大学、オンライン）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 秋吉收
2. 発表標題 魯迅和日本，以及其文本探尋
3. 学会等名 「我們的魯迅」工作坊 台大文學院「中國文學創新研究與跨國漢學建構」計畫講演会（於：台湾大学中文系、オンライン）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長堀祐造
2. 発表標題 陳独秀訳注「婦人觀」（Max O'Rell著）の日本書材源及びその訳注者・深澤由次郎について 併せてMax O'Rell 原著にも触れて
3. 学会等名 国際シンポジウム：周氏兄弟と1920年代 『新青年』から『語絲』へ（於：早稲田大学、オンライン）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 工藤貴正
2. 発表標題 「五四」後の知識人の責任 「フェアプレー論」を巡る魯迅・周作人・林語堂の論理を視座に
3. 学会等名 国際シンポジウム：周氏兄弟と1920年代 『新青年』から『語絲』へ（於：早稲田大学、オンライン）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小川利康
2. 発表標題 周作人と創造社：以厨川白村の影響為中心
3. 学会等名 創造社百年記念学術研討会（オンライン、中国人民大学）2021年12月11日（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小川利康
2. 発表標題 ボードレールと中国
3. 学会等名 生誕200周年記念シンポジウムボードレールの《世界性が--西洋と東洋の境界を 越えて--（日本フランス語フランス文学会東北支部会）2021年11月27日（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小川利康
2. 発表標題 周作人と優生学-----進化論受容の手がかりとして
3. 学会等名 中国文芸研究会例会 2021年7月25日（オンライン）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋吉収
2. 発表標題 魯迅と北京星星文学社『文学周刊』 以周靈均『サン詩』為線索
3. 学会等名 紀念魯迅誕辰140周年“魯迅與現代文化價值重建”國際學術研討會（オンライン、中国魯迅研究会主催）（國際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋吉収
2. 発表標題 現代中国对日本大正文壇の訳介与接受
3. 学会等名 第3回山東論壇 文明互鑑：東亞人文交流与相互認知（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋吉収
2. 発表標題 創造社の三個“批評家” 圍繞成ホウ吾与魯迅的論戰
3. 学会等名 創造社百年紀念學術研討會（オンライン、中国人民大学）2021年12月12日
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長堀祐造
2. 発表標題 魯迅研究の回顧 わが三十三年の夢
3. 学会等名 慶應義塾中文学会（Zoomによる）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 工藤貴正
2. 発表標題 雷震與大正主義的時代
3. 学会等名 台湾・国立政治大学文学院・國際漢学碩博士專班Google Meetによる（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 秋吉收（分担執筆）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 復旦大学出版社（上海）	5. 総ページ数 623
3. 書名 本味何由知 <野草>研索新集	

1. 著者名 長堀祐造（共訳）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 柘植書房新社	5. 総ページ数 524
3. 書名 毛沢東思想論稿	

1. 著者名 秋吉收（分担執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 上海遠東出版社	5. 総ページ数 406
3. 書名 日本漢学中的上海文学研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

周氏兄弟と1920年代 『新青年』から『語絲』まで https://zhoushi.ogawat.net/ 周氏兄弟研究青年論壇 https://shuren.ogawat.net/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	長堀 祐造 (Nagahori Yuzo) (40208046)	慶應義塾大学・経済学部(日吉)・名誉教授 (32612)	
研究分担者	工藤 貴正 (Kudo Takamasa) (80205096)	愛知県立大学・外国語学部・名誉教授 (23901)	
研究分担者	秋吉 収 (Akiyoshi Shu) (90275438)	九州大学・言語文化研究院・教授 (17102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 周氏兄弟と1920年代 『新青年』から『語絲』まで	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 周氏兄弟研究青年論壇	開催年 2023年～2023年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------